



「サイロ・エフェクター高度専門化社会の罫（ジリアン・テット著）文藝春秋刊」という本が話題になっています。サイロ効果(Silo effect)とは、牧場のサイロのように、中に入ってしまうと外が見えず、その中が世界のすべてであるかのような思考や行動をしてしまい、しばしば大きな間違いをしてしまうことをさしています。この本では、その一例として、ソニーの失敗を取り上げています。ソニーは、当時、タテ割りの強い事業部制を敷いていましたが、ウォークマンで大成功した事業部が自分たちの方針と実力を過信して他の事業部や経営者の意見も無視して独走した結果、その後の事業展開に失敗し、世界のデジタル音楽市場から完全にドロップアウトしてしまったというわけです。

サイロ効果は、実は新しい概念ではなく、科学の世界では「学問のタコツボ化」と称してすでに数十年前前から指摘されています。近代科学は、専門化がどんどん進んだ結果、狭い専門分野(discipline) (=タコツボ) のことしか知らない、あるいは興味がないタコツボ研究者がたくさんできてしまっている状況になっています。もちろん、自然や社会のある部分や側面のみを取り出して理解し活用するために、専門化はそれなりの必然性もあります。ただ、複雑な地球の自然と人間の相互作用の理解と未来可能な社会を包括的に考える総合地球環境学には、学問のサイロ化(タコツボ化)は、致命的です。

その地球研でも、個々の研究プロジェクト、センター(部門)、管理部と、それぞれの目的と役割・機能をもった単位になっているわけですが、それぞれが「サイロ」にならないような仕組みと努力はとても大切です。たとえば、些細なことかもしれませんが、物理的な壁を作らない(低くする)ということは、意外と大切です。研究棟では、それぞれの単位をオープンスペースでレイアウトしています。これは研究のサイロ化・タコツボ化を避けるための重要な条件として、日高初代所長が強く主張されたとのこと。大英断だったと私は思います。